第四章

中四国学連とわが剣道部

幹事長として

中四国学生剣道連盟幹事長
山根秀明

本年、連盟創立四〇周年を迎えるにあたりまして、連盟の設立、また、育成・発展にご尽力いただきました諸先輩方に敬意と謝意の辞を申し上げます。

この四〇年の間には私達のはかり知れない労苦や困難があったと存じます。私達は先輩方が築かれたこの連盟を引き継ぎ、さらに発展させていかねばならないと考えております。

現在、剣道界では、剣道人口の減少が叫ばれており、特に小中高校生の減少が甚大であり、全国的に部員の確保が困難である大学が多数あると聞いています。この次を担う世代なしでは連盟、また、剣道の充実、さらなる発展は望みようがありません。幸い、本連盟では昨年新たに美作女子大学、岡山県立大学、福山平成大学の三校の加盟があり、部員の登録数も多少増加しており、たいへん喜ばしい限りであります。しかし、今私達がよければそれで良いということでは済まされません。私達の後輩となる次世代のために大々的にとはいかないでしょうが、マスメディアにも取り上げていただくことが大切でしょう。現在全国大会レベルでみても、剣道大会がＴＶで放送されるのは地域放送を含めても数えるほどしかありません。私達が積極的に外へ働きかけていくべきところも多くあるように思います。

また我々学生と地域との繋がりも大切な要素です。どんな小さなことでもお手伝いできる事があればすすんで行なうべきですし、このことは、私達が社会に出てなんらかの形で役に立つことになるでしょう。しかし、マスメディアに取り上げていただくにも、地域のお手伝いをするにしても、私達が正しい剣道を指導できる力を身に付けておかねばなりません。これは、各々が普段の稽古の中で自分自身が立派な剣道を実践できるよう、意識して取り組むべきであります。

また、平成六年三月に岡山で第一回リーダーズセミナーを、続いて、平成七年三月に第二回を開催しました。このような機会を通してふだんできない大学間の交流ができれば、本連盟のさらなる発展につながっていくと確信しています。さらに、この会が充実してくれば中高校生なども対象にしていただき、より有意義なものにしていきたいと思っております。

本連盟が五〇周年、一〇〇周年と発展していくよう私達学生自らの力を結集して試行錯誤を繰り返し、さらに充実した具体的実践をしていかねばならないと考えています。

学生役員　中四学連を語る

〈学生役員の宿命、剣道部員確保のために、剣道試合規則の改善要求、開会式・閉会式の改善、学生審判の可能性、中四国学連の将来に向けて〉など、現在の中四国学連のもつあらゆる問題にアプローチ。昨年と今年の中四学連の推進役である学生役員が、学連のかかる問題と今後の展望を大いに語る。

座談会に出席のみなさん
左から、矢内、久米田、木原、吉岡、浮穴、高馬、川島の各氏。

出席者
浮穴　和義（平成五年度　幹事長）
吉岡　進（平成五年度　副幹事長）
矢内　克裕（平成六年度　幹事長）
川島　毅（平成六年度　副幹事長）
久米田泰利（平成六年度　副幹事長）
高馬ゆかり（平成六年度　女子部長）
司会
木原　資裕（鳴門教育大学）

学生役員の宿命

司会　今日、会場に来る車の中で聞いたのですが、大会などの宿泊を常任幹事のみなさんは、ホテルを取っているとばかり思っていたのですが、実際には、幹事同志の下宿にザコ寝などをして経費をかけないようにしているとのことですね。いろいろ大変だったと思いますが、特に幹事長をやり終えて、まず幹事長という役職について話をしてください。お願いします。

浮穴　二・三年生の内は、幹事である前に剣道部員であることが優先されますから、稽古と部内の下級生としての役割を果たさなくてはなりません。しかし、幹事長になれば、すべてに優先して幹事長としての責務を果たさなければならず、逃げたくとも逃げられないし、四六時中いつでも幹事長でいなければならない、その責任が違います。

司会　幹事長というと一般の剣道部員から見ると、ステイタスも高いし、結構いい思いをしているのではないかと思うのですが、その辺はどうですか。

矢内　他の連盟とのつき合いもありますが、中四国学連では交際費は認められていませんから、個人負担もかなりあります。私に限らず、そういう意味においては、いい思いはあまりしていないと思います。ただ、責任も重い代わりに、幹事長でなければ経験できないこともあります。

司会　川島君と久米田君は常任幹事・副幹事長と選手・主将（久米田君は副主将）という立場でがんばってきたし、久米田君は昨年の全日本学生選手権にも出ていましたね。

久米田　選手として一番練習しなければならない時期に、広告取りやパンフレット作成などの仕事があり、練習と学連の仕事が重なり、たいへんでした。両立は難しいと思いました。学連の仕事も手抜かりがあったこともあり、先輩や同僚に迷惑をかけたこともたびたびです。

新人戦で大会準備をすすめる役員たち

高馬ゆかりさん
岡山大学４年

川島　厳しく見れば、両方とも中途半端になってしまったと私自身は反省しているところがあります。師範の杉本八郎先生にも随分しかられました。岡山大にいれば、主将でなくてはなりません。特に大会前はそうですが、立場の使い分けをしなければいけませんでした。私は学連の仕事を先輩・後輩の連携で何とかしのいでいました。

久米田　ある意味では、中四国連盟だから、こういった兼任ができるのだと思います。関東・関西では常任幹事クラスになるとほとんど練習に出られないで、学連の仕事のみに専念しなければならないと聞いています。全日本などの時に、他の連盟からもうらやましがられたこともありました。中四学連の現状は選手権大会は愛媛（松大）・優勝大会は広島（広大）・新人戦は岡山（岡大）が担当というふうに開催地がわかれており、仕事を分担していることも、兼任ができた要因だと思います。

司会　学生の本業である学業においてもがんばっていますね。高馬さんは今年の兵庫県教員採用試験に合格されたとのこと、おめでとうございます。常任幹事兼選手で、しかも難関の教員採用試験に現役合格の秘訣は何かあるのですか。

高馬　勉強を始めた時期は遅かったのですが、学連の仕事をやれたのだから、追い込みをかけたら行けるのではないかと思っていました。学連の仕事を最後までやり通せたことが、自分の中で自信になっていたように思います。

吉岡　私も大学院の受験の時期と試合が重なっていました。その当時は結構大変だったと思うのですが、今となってはいい思い出です。確かに、学連の仕事で自信をもてたところもありますね。矢内君も優勝大会の一週間後が大学院の試験でしたね。

矢内　勉強の遅れにあせりがありましたが、最後は開き直ってやるだけやろうと思って、あまり寝ないで勉強しました。

司会　そして合格。すごいですね。こういった大変さは中四学連役員がもつ宿命かもしれませんね。しかし、そのことで自分を大きくすることができ、物事を深く考えることができたのではないでしょうか。そこが、最後には生きてきたというのがこれまでの話ですね。

剣道部員確保のために

司会　高校までの剣道経験者が大学でも続けてほしいという気持ちは学連としてもっているわけですが、そのためにはどのようなことが必要ですか。

高馬　大学での剣道は厳しいというイメージがあり、私の場合、中学・高校と厳しい先生がいなくて、自

司会・木原資裕先生
（鳴門教育大学）

分たちの好きなように剣道をしてきたので、大学で続けるかどうか迷いました。大学剣道のイメージを変える必要があると思います。大学に入学したのだから、自由な雰囲気で、楽しく、リッチな気分を味わえ、しかも遊びごころも満足させたいというのが、今の学生気質でしょう。

川島　剣道にリッチな気分はないでしょう。

久米田　防具は高価ですから、リッチでないとだめです。（笑い）

浮穴　学生剣道にもいろいろなタイプがあります。武道学科があるような大学でのガンガン稽古する剣道部もあれば、ほとんどサークル・同好会と変わらないような剣道部もあり、それを一つのものとしてまとめようとするところに問題があるでしょう。現在は、一大学一団体の登録しか認めていませんが、サークル・同好会も加盟することも将来的には考える必要があると思います。遊び気分でする剣道も無視できないですね。剣道人口問題もそうですが、がっちりした封建的な組織に自分はとらわれたくないという気持ちが今の学生には強いと思います。そういうところも学連はくみ取っていく必要があります。

吉岡　欲求レベルが徐々に上がることが期待できると考えられますね。最初は、お楽しみ程度のものが技術レベルが上がれば、大会にも出たいと思うようになり、剣道部らしくなっていくことだって可能だと思います。

浮穴　サークルであっても、学連に加盟して徐々にやっていけば剣道部らしくなっていくようなエレベーター的な役割を、学連が果たして行ければいいですね。

矢内　高校までは剣道をやっていて、大学でも続けているという人は少ないと聞きます。一つには、指導者の問題があるように思います。中・高校の剣道の指導者は教師である場合がほとんどで、教師になっているからには大学、つまり学連出身者です。学校の指導者が立派であれば、生徒は「先生みたいになりたい・先生のような剣道がしたい」と考え、大学に入っても続けるのでは。また、教師も生徒に日頃から、剣道を進学してもずっと続けていくように指導をしてほしいです。学連ＯＢ、すなわち先生方と現役学生が一丸となって良い指導者作りをしていかないといけないと思います。

吉岡　進さん
岡山大学平成６年卒

剣道試合規則の改善要求

司会　話はかわりますが、中四国学連で初めて行なったリーダーゼミでの質問の中に「テーピングはなぜ片足のみ許可されるのですか。両足を痛めている場合もあると思うのですが」との質問がありました。

吉岡　なぜ片足でないとダメなのかという根拠は明確には示されていないと思うのです。スプリングのきいた道場を持っている大学は、別に問題はないでしょうが、床の硬い体育館で行なっているようなところでは、かかとや足首を痛めがちです。確かに、素足でテーピング等がない方が見た目はきれいですが、ケガ悪化予防のためにも、それを規制し過ぎるのは問題があると考えます。

矢内　テーピングをすれば試合が有利になるということもないでしょう。

久米田　足さばきの悪さを直す意味からもテーピングに頼るなという教育的指導でしょうか。

高馬　以前、全剣連での女子の竹刀の重量がかなり重くなる規定の変更も、学連からの強い要望で軽減されました。テーピングに関しても、学連から規則を変化させる可能性も十分あると思います。

川島　それから、竹刀の太さの規定に男女差があるのはおかしいと思うのですが、竹刀の重量の男女差はありますが、使っている面の規格に男女差はないはずですから。

久米田　女子の竹刀の重量で男子と同じ太さにするのは竹刀作成上むつかしいし、一般的に女子の方が体格も小さく、従って面も小さいものを使用しているからではないの。

川島　女子でも男子以上の顔の大きさをしている人も多いですよ。（笑い）

浮穴　あと応援の問題も納得がいかないですね。なぜ拍手だけなのか。応援をしている人が試合者と一体になれるオーという歓声があっても、試合の雰囲気は壊れずに逆にいい意味で盛り上がると思います。黙って力一杯拍手だけしている方が不自然に思います。

吉岡　相撲のテレビ中継を見ていても大事な一番の最後の塩に行く時には、歓声があがりますが、立ち合い直前にはすべての観衆が息を凝らしてその瞬間

※両足テーピング・サポーターの使用については平成七年七月の剣道試合・審判規則の改正により認められることとなっています。しかし、この座談会実施の時には改正の内容は、公表されていませんでした。

久米田泰利さん
松山大学４年

を見つめています。その静まり返った緊張感のよさはよくわかります。剣道はこれをずっと保って歓声を上げるなといっているようです。しかし、相撲では、決まりそうな技の応酬には必ず歓声が上がっています。

もちろん、興業としての相撲と剣道は違うといってしまえば、それまでですが、見ている人を大事にする視点を学連はもってもいいでしょう。

久米田　ヤジが飛んだり、太鼓やウエーブが起こったりすると大変ですが、剣道ではそこまではいかないでしょう。

開会式・閉会式の改善

司会　大会運営として、開会式・閉会式の改善の余地はありますか。

浮穴　正直に言って私の経験上、運営側からは開会式・閉会式は重きを置いていないというか、時間的に苦しい問題です。特に閉会式は、どうしても予定進行時間をオーバーしてしまい、選手や審判員の帰宅の列車や船の時間などを考えると十分に時間がとれないのが現状です。

川島　現在、閉会式欠席届を提出させるようにしているが、お約束事のようになっています。せめて開会式は、もっとしまりのあるピリッとしたものにしたいですね。

高馬　開会式の入場行進にしてもこれから試合をするのだという意気込みやすがすがしさが感じられる行進がほとんどないし、選手宣誓もありきたりで、聞いている者に何の感銘も与えていないように思えます。マニュアル化し過ぎていることの弊害でしょうが、自分たちの身近なところにももっと改善できることがあるように思います。

吉岡　閉会式をスムーズに行なうためには賞状は鉛筆書きでもよいのではないか。高体連などの県レベルの大会ではそのようにしているし、後で自分の学校の事務の人に書いてもらった方が立派なものができると思います。下手な字で焦って書いた賞状にはありがたみも薄いと感じます。

矢内　鉛筆書きの賞状を渡すことに学連の品位がないと思われている人も多いようです。実状として、毛筆で賞状の字が上手に書ける学生を毎年確保するのが難しいですし、ワープロでの作成にしても時間がかかっています。団体の賞状などは二・三日すると部室の隅に転がっていたという話も聞きます。我々が一生懸命作ったものが、価値を以って遇せられていないのではないかと思います。

川島　毅さん
岡山大学４年

久米田　確かに、団体戦の賞状は専用の道場とか、広い部室があれば問題ないでしょうが、そういうものがない大学は管理が難しいと思います。

吉岡　甲子園の高校野球の閉会式を見ていても、賞状の授与はなく、優勝旗の授与に焦点が当てられています。こうした演出効果も学連としても考えるべきであると思います。

浮穴　賞状を渡すだけの閉会式では、入賞したチーム以外は閉会式に出ている意味がないでしょう。確かに、勝者を称えることは大切であることかもしれませんが、実際にはそのような雰囲気は閉会式にはないように思います。何か付加価値がないと閉会式に残ること自体、あまり意味がないでしょう。

久米田　今の学生の気質として、負けても残って試合を見るより、負けたら早く帰りたいというのが、本音だと思います。剣道のように閉会式に選手を残すようにしている他の種目はありますか。ほとんどのところは入賞者だけでしょう。

吉岡　学連の場合も、入賞者だけで閉会式をするようにしてもよいのではないでしょうか。

学生審判の可能性

司会　学生に審判の経験をさせる意味からも、新人戦には、学生審判（三・四年生）の起用を実施してはどうかとの意見についてどう思いますか。

久米田　絶対反対です。現状の審判にも不満を持っている者もいますし、まして、学生審判では収拾がつかないと思います。

川島　私も反対です。中四国学連の三大大会としての新人戦の意義と権威が薄れてしまいます。

浮穴　指導者のいる大学では、ある程度審判技術を指導されているとは思いますが、そうでない大学は大変でしょう。すぐに学生ができるものではありま

浮穴和義さん
広島大学　平成６年卒

せん。研修会・予備大会などが必要です。もし、学生が審判をするとすれば、ＯＢ二人に対して学生一人の割合で、ＯＢの審判員の中に数名まぜて行なうようになると思います。もし学生がミスジャッジをした場合のＯＢからのフォローも必要です。失敗ばかり恐れていても前に進まないが、十分に検討すべき問題だと思います。

吉岡　学生主体の学連でありながら、先生の権威に頼ろうとする姿勢が問題です。大学を出れば、指導者として審判をしなくてはならないのですから、その訓練を学生時代に学連として行なうことは意義のあることだと思います。

司会　現役役員とＯＢ役員で意見が分かれていますね。先日行なった中四国学連幹事へのアンケートでも賛成・反対は五分五分でした。関東学連でも、以前学生審判を取り入れていましたが、現在は行なっていないようです。もちろん、現在と比べると状況も違うでしょうが、その辺の事情も調べる必要がありそうです。

中四国学連の将来に向けて

司会　最後に中四国学連が将来に向けてやるべきことがあれば、お願いします。

浮穴　私が思うに、現在の中四学連の最大の問題が幹事会です。幹事会は大会の抽選会や前日に行なわれるため、抽選や試合の連絡事項さえ終われば、幹事会の議題には全く関心のない学生がほとんどです。幹事会時に「何々についてどう思いますか」と尋ねても、「部に持ち帰って考えます」とか「別に意見はありません」等、大学の代表として出席している自覚の全くない幹事が多すぎます。個人の意見で良いのだから少しは活発に意見を出してもらいたい。もっとひどい場合は、抽選会時に「大会の前日までに、各大学の意見をまとめておいてください」と言っておいても、何ら答えの帰ってこない大学もあります。また、幹事会以外のことに関しても、例えば期限までに提出すべき書類や登録費がいつまで経っても送られて来ないといったことは日常茶飯事です。

矢内　これらの事を解決するには、必ずリーダーゼミを年一回開催すべきです。その場で、今、中四・全日学連が抱えている問題、登録や提出書類等についても詳しく説明・討論すればよいでしょう。

吉岡　九州学連などは実施しているようだが、かなり効果があるとのことです。常任幹事と幹事の交流があまりないのも幹事会の盛り上がらない理由でしょう。妙に皆よそよそしいのです。このことも、リーゼミの中で、飲み会や稽古会など行なうことで解決すると思います。また、各大学側もしっかりとした意見の言える人を幹事に選ぶべきで、幹事一人一人が、大学の代表であることを認識すべきでしょう。

矢内克裕さん
広島大学４年

高馬　幹事アンケートの中に学生幹事の位置づけをあげるために会報の発行をしてはという意見がありましたが、大会運営に携わっていない地域の大学が中心になって編集できればいいですね。

矢内　あと、現在の常任幹事がしっかりして、次の常任幹事を育てることが大切でしょう。

浮穴　私も、少しでも立派な組織を次の代の幹事に残したかということが、その代の学生役員の業績だと思います。失礼ながら歴代の学生役員の方々を見てみると、何の記録も書類も残っておらず、その時代に何が問題になっていたか、どういうことが成されたのかがさっぱり分からないといったことがあります。逆に、きちっと書類や仕事の記録を残してくれている先輩方もいます。そういったものは、表面に出てこないのですが、非常にありがたく、参考になります。まさに我々の財産です。

　有形・無形にかかわらず、先輩方の残していただいたものを振り返り勉強していきながら、より深く考えていくことが最も大切なことであるように思います。もし、学連幹事が大会を開くだけの手足でしかないのならば、いくらしんどい思いをしてもなんら意味がないとつくづく思うのです。学生生活の大部分を連盟のために尽くす学連幹事が、裏方でしかない今の状況は悲しい気がします。今後も学連幹事は、大森玄伯先生の「学生自身による学生剣道の運営を」というご遺志を全力で受け継いでいかなければいけないと強く思います。

この座談会は、平成六年一二月三日（中四国学生剣道新人大会前日）岡山市にて行われました。

第1回 リーダーズセミナー報告

この度、中四国学生剣道連盟では設立四〇周年を迎えるにあたり、中四国学生剣道連盟の活性化を図る意味で第一回目のリーダーズセミナーを企画・開催しました。その概要を報告します。

一、セミナー開催の趣旨

①指導者がいない大学への啓蒙

監督・コーチのいない大学は学生主体で部を運営しているが、学生だけでは限界があり、練習方法等についてアドバイスが欲しいとの要望があったこと。

②各大学間の交流

試合の場だけではなく、もっと多くの大学間の様々な交流の場を持ちたいとの希望が多かったこと。

③中四国のレベルアップ

先生方や他大学の話を聞くことによって剣道に対する意識を変え、大学のみならず中四国地区全体のレベルアップを図ること。

④幹事会の活性化

現在の幹事会は各大学からの意見や要望もなく、大会の抽選をして帰るだけの形式的なものになっている。加盟大学の学生にもっと本来の幹事会の意義と役割を理解してもらい、今後の運営に一層の協力を要請すること。

二、開催期日

平成六年三月一二日(土)～一三日(日)

三、場　所

岡山県玉野青少年スポーツセンター

四、日　程

[第一日目（三月一二日）]

・オリエンテーション（司会…白壁常任幹事）

幹事長挨拶（矢内幹事長）

木原先生挨拶（鳴門教育大学）

・講　演

講師紹介　境先生（島根大学）

山中洋介先生（鳥取県立鳥取西高等学校教諭）

中塚美枝先生（岡山県立誕生寺養護学校教諭）

・合同稽古

・夕食・入浴

・懇親会

[第二日目（三月一三日）]

・起床・掃除

・朝食

・合同稽古

・講演補足・話題提供

山神先生（香川大学）より「カーボン竹刀」「打撃力」についてのバイオメカニクス的見地からの話題提供。

・参加者全員から感想及び一言

・解散

五、講演要旨

私の剣道修行ポイント

［山中洋介先生］

やまなか・ようすけ
教士７段
昭和35年生まれ（広島県福山市出身）
ＰＬ学園高等校・筑波大学卒業
インターハイ個人・団体優勝
全日本学生個人・団体優勝
全日本選手権大会第３位
全国教職員大会個人優勝

マイナスの要因をプラスの要因に

昭和五八年に筑波大学を卒業し、鳥取国体の先鋒要員として鳥取西高等学校に勤務して以来、一一年になります。その間、昭和六〇年の鳥取国体までは、強化練習も数多く行なわれ、国体での優勝を目標に稽古に励んでいました。しかし、国体が終了し、一段落すると、これからどこに目標を置いて稽古に取り組んでいけばいいのか悩んだことを覚えています。また、都会ほど稽古を行なう環境に恵まれていない地方において、自分の技量を落とさずに維持・向上させるにはどうしたらよいのかという悩みもありました。

そういう状況の中で、平成五年の全日本選手権大会において三位に入賞できたり、教職員大会で個人優勝できた要因を考えてみますと、自分自身の中でマイナス要因をプラス要因に変えていったからではないかと思います。自分自身が満足する稽古ができないという不安な心理状態にある中で常に心掛けたことは、絶対に受け手に回らないという事でした。また、自分の攻めを向上させるためにも常に前向きに取り組むこと、そして、「打って勝つのではなく、勝って打つのだ」ということを念頭に置いて稽古に取り組みました。

イメージトレーニング

全日本選手権や国体といった全国大会に出場する際には、自分が理想とする剣道家の試合は絶対に見落とさないようにしました。そして、その人の剣道をイメージしながらイメージの中で実際にその人と対戦するわけです。もちろん自分の良い部分も悪い部分もイメージしますので、打たれる場合もあるわけです。

このようにイメージしたことを、鳥取に戻ってからの稽古において再現してみるわけです。また実際に稽古できなくてもイメージトレーニングだけは欠かさず行なってきました。

今後は加齢と共に体力も低下してきますので、稽古方法を工夫しなければならないと考えています。

剣道のねらい

剣道を始めて二五年になりますが、高校・大学において、自主的に、工夫をしながら稽古することを学んだように思います。今振り返ってみますと、私の剣道の一つのスタイルが確立されたのはこの時期だと思います。

これまで剣道を志してきて思うことは、結局剣道は剣道の理念にあるように「人間形成の道である」ということです。現在はどちらかと言えば表面的な競技性の部分に目がいっていますが、剣道は他の競技と違い生涯にわたって続けていけるものですし、最終的には自己実現のための剣道でありたいと思っています。

今回お集まりの皆さん方は、それぞれ様々な価値観で剣道を行なっておられることと思います。どれが正しいということはないと思いますが、どういう目的意識であっても、自分が生きていくために剣道がプラスにならなければ嘘だと思うのです。今後剣道を続けていく人はなお剣道を磨きながら人間を造っていき、また仮に剣道をやめても、これまでに培ってきた剣道の精神力を社会で生かしていけば、きっと立派な人間になることができると思います。

私も今後さらに剣道に励み、立派な人間になるようがんばりたいと思います。

剣道と学業の両立を目指して

［中塚美枝先生］

なかつか・みえ
４段
昭和43年生まれ
作陽高等学校・島根大学卒業
インターハイ団体第３位
全日本女子学生個人第３位
中四国女子学生個人優勝
中四国女子学生団体優勝

悩みの中で

大学卒業後、二年間講師をし、現在、精神薄弱児を対象とした養護学校に勤務しています。小学校・中学校・高校時代と幸いにも全国大会である程度の成績を収めることができ、一般的には剣道のエリートコースを歩んで、前向きに剣道に取り組んできたと思われがちですが、実際は節目節目において悩み

がありました。

私は剣道を行なう上で、ただ剣道だけをやるのではなく剣道の良い所を生活に生かしていきたいと思っていましたし、また学業と剣道との両立を常に考えて取り組んできました。しかし、常に前向きに剣道だけに情熱を注いできたわけではありません。

高校時代、休日に練習や遠征があり、他の人を羨ましく思ったこともありましたし、練習で疲れて勉強に身が入らないこともありました。学業と剣道を両立するために作陽高校を選んだにもかかわらず、剣道しかできないのであれば何のためにきたのかと真剣に悩んでいました。

部活動の中で、剣道だけでなく勉強もしたい、そういう色々な価値観がなかなか認めてもらえないということが不満で、真剣に恩師に相談したことがあります。そのときは恩師の一言で踏み止どまることができ、実績としてもある程度のものが形として残りましたが、本当に自主的に取り組んだのではなく、消化しただけで決して良い状態で過ごしたわけではなかったと思います。しかし、このように一番悩んだ高校時代が、今振り返ってみると人間的に一番成長した時期であったような気がします。今では高校時代の恩師に感謝しています。

剣道の素晴らしさ

大学は小さい頃からの夢である教師になるために、あえて地方国立大学を選びました。今までとは違う環境で、エリートだけではない、様々な価値観を持った人達と剣道をすることができて本当に良かったと思います。大学というのは学生主体で自分たちの意見が反映されやすく、やればやるほどいい方向に進むことができると思いますし、逆に怠けていればぼんやりと過ごすこともできます。どうするかは本人の気持ち次第だと思いますし、やり方一つでどうにでも変わるものだと思います。私にとって、大学時代は一番貴重な時期でしたし、大学時代の剣道があったからこそ、高校時代のマイナスのイメージをプラスに変えることができたと思います。

現在は学校で子供達五人を集めて剣道クラブをつくっています。竹刀を振るのもやっと位の子供達ですが、本当に楽しくやっており、逆に剣道の素晴らしさを教えられた気がしています。勝敗だけで見えなかったものを教えてもらったと思っています。

剣道では勝敗だけにこだわるなとよく言われますが、それがすべて悪いというのではなく、こだわるからこそ得られるものがたくさんあると思います。今社会に出て、勝負の世界に生きてきたことが自信となっていることが大いにあります。どんな困難にもここで負けてはいけないというのは剣道も人生も同じだと思います。皆さんもこれから色々な形で剣道を続けていかれることと思いますが、どうか剣道の良さを何か一つでも見付けて、それを生かしてほしいと思います。

最後になりましたが、リーダーだからといって一人で悩むのではなく、部員全員で剣道部を作り上げていくようがんばってください。

六、参加者の感想

- 大会だけでは図れない交流ができ、他大学も同じような悩みを抱えていることが分かった。
- 普段は大学の中だけの稽古しかできないが、今回先生方をはじめ色々な人と稽古をお願いすることができ良い刺激になった。
- 頂点を極めた人の話しや、剣道を様々な角度から見たお話をうかがうことができ参考になった。
- 先生方や他大学の人の話を聞き、自分の剣道を振り返ることができた。この経験を生かし、これからいい意味でこだわりを持って剣道を行なっていきたい。
- ぜひ来年以降も実施してもらいたい。

七、まとめ

初日の夜には講師の先生を囲み懇親会を開催しました。お酒が入っていたせいもありますが、学生も先生方も非常に打ち解けた雰囲気でついつい酒量が増えてしまいました。（翌日の稽古には前夜の余韻をもって参加したものも若干いたような気がします。）その中で山中先生による宮崎選手（全日本選手権二連覇）についての話や、中近東への派遣指導

の話はユーモアも交えたもので、学生はお酒を飲むのも忘れて聞き入っていました。また中塚先生にはご自身も中四国連盟出身ということもあり、自分の経験を元に非常に説得力のあるお話をうかがうことができました。

第二日目の稽古には、島根大学ＯＢで岡山県在住の四名の先輩が稽古に参加され、前日以上に充実した稽古になりました。

今回が初めての実施ということで、二七校の参加でした。すべての加盟大学からの参加が得られなかったことは残念でした。これは実施時期が三月中旬ということもあり春期合宿と重なったり、連絡が不徹底の部分があったこと、また場所の確保が難航し、連絡が遅れたこと等が原因になっていると思います。しかし、色々な問題点があったにしろ、とりあえず第一回目を実施することができたということは意義深いことだと思います。参加者の感想にもありましたように、是非継続していきたいものです。

＊参加者名簿

- 講師…山中洋介、中塚美枝
- 連盟教官…木原資裕（鳴門教育大学）、山神眞一（香川大学）境英俊（島根大学）
- 連盟幹事…矢内克裕（幹事長）、久米田泰利（副幹事長）、高馬ゆかり（女子部長）、白壁伸太（常任幹事）、山根秀明（常任幹事）
- 加盟大学代表…藤村安彦（愛媛大学）、金本淳一（岡山大学）、貞本康仁（岡山理科大学）、安永昌司（香川大学）、上西功二（近大工学部）、向井康之（高知大学）、公文修（四国学院大学）、園田慎吾（島根大学）、稲若明美（島根大学）、赤松美保（聖カタリナ女子大学）、藤田将光（徳島大学）、東浦利行（徳島文理大学）、岩永幸義（鳥取大学）、岸利栄（比治山女子短期大学）、浜村健一（広島経済大学）、千草源太（広島工業大学）、江谷満里（広島女子大学）、星野寿人（広島修道大学）、森嵜誠一郎（広島大学）、河本剛（広島電機大学）、峠周治（福山大学）、飴野秀樹（松山大学）、冨田真司（山口大学）、安達香里（就実女子大学）、熊澤圭祐（吉備国際大学）、青崎良二（東亜大学）、宇尾知佐子（鳴門教育大学）

第二回リーダーズセミナー報告

開催期日　平成七年三月一八日（土）～一九日（日）
開催場所　香川県青年センター

リーダーズセミナーの感想

先日の三月一八日・一九日の二日間、香川県青年センターに於いてリーダーズセミナーが行なわれました。短期間でしたが、内容も濃く、充実した二日間でした。

今回は講師として松山商科大出身の大城戸先生と香川大出身の倉知先生をお招きしました。両先生の講演も非常にすばらしく、学生から質問等も出て先生と学生が一体となった講演会となりました。倉知先生は、部の在り方・運営等についてお話しをしてくださり、部活動は勝つためだけの剣道ではなく部員全員のことを考えた剣道をやっていくことを教えられました。大城戸先生は、剣道を始めてから世界選手権で優勝するまでのことを話してくださいました。やはり強くなるためには人より多く練習しなければいけない、と痛感しました。また、自分の人生において剣道とは何なのか、何のために剣道をしているのかをあらためて考えさせられたことでした。二日目には大塚先生に〝剣道の一本〟について講演していただいた。実際に斬るための訓練として始まった剣道が竹刀の登場によりだんだんスポーツ化して行く過程で、一本の内容も変わっていったことを話してくださり、一本の定義の必要性を感じました。

初日の稽古会は山神先生の指導のもとに行なわれました。準備運動方法について指導していただきましたが、今まで自分たちが行なっていた準備運動がいかにいい加減であったかが認識されました。

二日目の稽古会では大城戸先生に素振りの指導をしていただきました。竹刀の軌道、手首の使い方、肩の動かし方等、細かく指導されました。地稽古もみんな一生懸命やっており、充実した稽古会でした。

学生討論会ではグループに分かれて各大学の問題点、幹部の在り方等を話し合いました。やはりどの大学も部員の減少が問題となって、少ないながらにがんばっているようです。色々な大学の意見が聞けてかなり有意義であったと思います。

しかし反省点もあります。例えば、参加校数が少なかったことです。加盟校四一校のうち今回参加したのは一五校しかありませんでした。日程的に合宿等と重なったのかもしれません。しかし、リーダーズセミナーというのは中四国連盟全体を盛り上げようというねらいなので、全大学が参加しないとあまり意味のないものになってしまいます。今後この点を考えて、開催日程を決め、また、全大学がぜひ参加したいと思うようなセミナーを計画していきたいと考えています。

最後になりましたが、忙しい中お越しくださった大城戸先生、倉知先生、今回ご協力くださいました大塚先生、山神先生、木原先生ありがとうございました。また、準備等をお願いしました香川大学のみなさんありがとうございました。

（近藤裕樹・広島大３年）

●第二回リーダーズセミナー講演

全員で合宿と練習を考え、やったあの頃

○香川大学OG
倉知順子

くらち・じゅんこ
5段・高松市立紫雲中学校教諭
香川大学卒業
全日本女子学生団体16位
全日本女子学生団体8位
中四国女子学生団体優勝

私は本当は中学の英語の先生なんです。なぜか剣道に関わり続けて現在に至っています。

私の父が剣道をやってたのが剣道との出会いです。また、同い年のいとこが剣道をやっていて、その子が強いんですよ。あの子にできる事なら私にもできるはず、と思ったのがそもそも間違いの始まりでした。で、一回やりはじめたらやめさせてくれないという親でしたから、今まで続いてしまいました。

香川大学の大林さん、剣道を始めて何年位になりますか？（大林さん）「一〇年位です」そうですか。じゃあ近藤君は？　（近藤君）「一四～五年です」ありがとう。では高校から始めた方？（二～三人）　何故始めようと思いました？「ただ面白そうだと思ったから」（他の人に）君は？「小学校の時、野球と剣道をしていたのですが、中学校では掛け持ちはだめで、剣道の方が大会が多かったので剣道を続けました」　そうですか。昨日、自分の中学校の部員にも聞いてみたんですね。すると、「本当は柔道部をみにきたんやけど、手を引っ張られて剣道部に連れて行かれた」「剣道部にかっこいい先輩がいて、あ、これは剣道やらないかん、と思った」とか、ろくな動機ではない人が多くいたのですが、まあ、動機は何であれ剣道を続けることが大切だと思うのです。

一年で七回やった合宿

私が香川大学の一年生の時、私の同級生は入部当初、男子九名、女子三名でした。最終的には男子三名、女子三名になりました。最初は女子も『三人娘』と呼ばれていましたが、だんだん監督も『三人息子』と言うようになり、まともに女性として扱ってもらえなかったような気がします。男子キャプテンが高校から剣道を始めた子で、残りの二人は中学校ではしていたけれども高校ではしていませんでした。女子の方は、小学校から延々やってきて高校でキャプテンをしたのが三人、私以外の二人は個人でインターハイにも行ったという強者でした。しかし、六人共すごく仲が良くて、どこに行くのも一緒でした。

大学時代で一番印象に残っていることは、とにかく合宿が多い、ということです。香川大学の江崎キャプテン、香川大学剣道部部歌の三番を歌って下さい。（江崎君）「♪新歓合宿、夏合宿、新二年合宿なんのその～♪」はい、結構です。こんな部歌がありまして、とにかく合宿が多かったのです。岡山理科大学の方、年間合宿何回ありますか？「二回です」広島大学の方は？「二回です」意外に少ないですね。じゃあ、徳島文理大学の方？「二回です」私が入部した時は、年間七回合宿してまして、監督の山神先生は何を考えとんのかなあ、と思っていました。先生を目の前にして悪口を言うのもつらいのですが。（笑）四月の間は入部して間もないのでちやほやされて良かったのですが、五月の初めに新歓合宿が一週間程あり、それが一回目、そして六月にインカレ合宿があります。これは普段の授業日です。それから夏合宿が徳山大学の方でありまして、女子は徳山大学の部員の所で寝泊まりし、男子は柔道場で寝泊まりしました。これも一週間近くありました。それが終わって、お盆に後期合宿というものが三～四日ありまして、そのあと秋までなく、平穏無事に過ごします。そして幹部交代をして、寒稽古合宿。これが四～五日ありました。その後、追い出し合宿、これはそんなにきつい合宿ではないのですが、ただ一年生にはきびしいお酒の飲み方の教授があります。その翌朝、海へ行って「泳げ！」と水泳指導です。一月の末にですよ。いまだに香大ではやっているそうですが……。最後に新二年合宿、これが一週間位あります。以上年間七回の合宿がありました。

また、毎朝のトレーニングが何よりもつらかったです。みなさん、さっき体育館で腕立て伏せやってましたね。誰かが「その人の体力に応じてやりなさい。壁に手をつけてもいいよ」と言っていましたね、山神先生？　あんなこと私たちの時はいってくれませんでした。ね、山神先生？（山神先生）「時代が変わりました」（爆笑）　そういうことにしましょう。三〇回、二〇回、一〇回、これで一セット。結局三セットやり、腕が足のようになりましたね。さっき、腰に悪いから足上げ腹筋はしないように、と誰かが言っていましたが、これを一分、五〇秒、四五秒の三回。ランニングも毎朝二キロ。その他諸々のメニューもあって、お昼はご飯が喉を通りませんでした。

合宿の話にもどりますが、みなさん合宿の日程とか場所、内容をどのように決めていますか？　誰が決めていますか？　幹部と監督？　そうですか。私たちも六人集まって朝から晩まで合宿の話をしましたね。四日間合宿をし、晩は武道館へ出稽古に行き、朝はかかり稽古を中心にやっていこう、という計画を立ててキャプテン一人が監督の所へ報告に行ったのです。ダメだ、と突っ返されたのですが、後から私たち全員で押しかけて、なんとかOKをもらったことがありました。合宿の計画を練る段階でとにかく幹部全員で話し合って、この合宿ではこのような力をつけたい、ということをまず考えました。やっぱり合宿では上級生が楽をしたらいかん、と思います。

合宿の計画で一番監督と意見が合わなかったのは夏合宿についてでした。私たちは地元でやりたい、地元でやって地元の先輩にたくさん来ていただきたい、そこでとにかく実力をつけたい、ということで計画を練って監督の所へもって行ったのですが、監督の方は「どうして外へ出ないのだ」というわけです。まあ、結局外へ出るようになって、岡山で大体大と練習試合をし、その後天理大へ行きまし

た。たまたま、その年の全日の大会で二回戦で天理と当たりました。胸を借りるつもりでやったのが良かったみたいで、なんと天理に勝ちました。その後、国士舘と対戦したのですがさすがに国士舘、全然歯が立ちませんでしたね。で、全日でまだ一勝もしていない私に、師範の植田一先生は「全日で一勝くらいしなければいけないよ」と言われました。その時私は三年で、もう引退だったのですが、「来年もまたがんばります」と答えて四年まで続けるようになりました。試合に出してもらうためには練習に来る、というのが次の幹部との約束でした。そして四年にもなって練習に行っていた甲斐もあって、なんとか全日で勝てて、やっぱり四年間やっててよかったな、と思いました。中四国では幹部交代は早いと思いますが、皆さんぜひ四年生まで続けて下さい。

いざ職場へ出て、大学時代が何に役に立ったかというと、『何があっても動じない度胸がついた』ということです。本来、私はこういうことを人前で話すことがなによりも苦手なのです、本当に。人前に出ると声が出ない、という性格だったのですが、剣道をしていて色々な場面で人と会うことが多くなったということが自分にとってプラスになったと思います。

子どもの指導にあたって

今、小中学生の間では、だんだん剣道人口が減っています。中学校では練習試合やらなにやらで休みがつぶれますし、保護者の負担も大きいものがあります。

私が指導している中学校も以前はとても強かったのですが、今は恥ずかしいことに一年生男子はゼロ。二年生男子は五人で、団体戦ギリギリの人数です。幸い女子は一、二年で一七人もいます。そんな生徒に、なんで剣道やっているの、と聞くと、「とにかく友達といるのが楽しい」と言うのです。女子は初心者が一〇名いるのですが、だれもやめないのです。〝とにかく友達といるのが楽しい〟これも大事なことだと思います。確かに、たくさん練習し、高いレベルになることも大事なことかもしれません。みなさんの中にも将来教員になる方とか、スポーツ少年団で指導する方とかいると思いますが、いかに楽しい部活にするか、ということも剣道人口を増やすのに大切なことかと思います。未経験者にとって剣道は敬遠されがちなものだと思うのです。確かに手間がかかります。しかし私の中学では、女子のレギュラーのうち二人が初心者です。初心者は、変なくせがないから教えたら教えただけ上達するんですね。やはり初心者の子、また、補欠でがんばっている子を大事にしていきたいと思います。

最近の子供たちは、色々な場面で我慢をするということもあまりないですし、友達と遊んだ経験のない子供がたくさんいます。だから、剣道を通じて友達ができたとか、友達とこんなことをしたんだよ、とか心に残るようなクラブ活動もこれから必要なのではないでしょうか。

大学でも四年間補欠でがんばる人もいるでしょう。やっぱり、部員みんなが、「ああ、剣道部で良かったなあ」と思えるような運営を、幹部としてやっていってもらいたいし、自分自身も納得のいくような稽古なり試合なりをやっていってもらいたいと思います。

これからは、先生方からも教わりながら、自分たちのもの、自己流のものを作って行って『中四国らしい剣道部』というものを作って欲しいと思います。

●第二回リーダーズセミナー講演

何のために剣道をやっているのか

○松山大学（旧松山商大）ＯＢ
大城戸　功

おおきど・いさお
７段教士
新田高等学校・松山商科大学卒業
全日本学生個人優勝
中四国学生個人優勝
世界選手権個人優勝

今日は、剣道はこうだとか、こうでなければならないとか、たかだか二七年しか剣道をやっていない私が、剣道について述べるのはおこがましいものがあります。しかし、私の体験を通しての気持ちのもち方などをみなさんに、今後、剣道をする上で参考にしていただければ嬉しく思います。

一昨年、松山で全剣連のえらい先生が来られて、講習会がありました。講習会が終わりまして、兵庫の鶴丸壽一先生（範士九段、七七歳）をＪＲの駅まで送って行ったんですが、そのときの車の中の話なんです。大阪の甲斐利一先生との話で「甲斐先生、俺はな剣道をはじめて七〇年や」と聞きまして、その時はもうハンドルがグラッと傾きました。七〇年というのは私にとってすごい年月で「自分でも二〇年以上もよく剣道をやったな」と思っていたところに七〇年という数字が出てきたものですからびっくりしました。鶴丸先生が「七〇年たったのに、俺の剣道ちゅうのはそんなもんや。あかんのう。」という話を甲斐先生にされてるのを聞きまして、なんてまあ奥の深いものを私はやってるんだろうと、逆に誇りに思ったりしました。

剣道との出会い

私が剣道を始めたのは小学校のおわり、中学校に入る前で、きっかけは友達に誘われたんですが、それまで陸上や水泳をやってました。中学校に入ったらまあ、陸上部でも入りたいなと思ってました。走り高跳びで非公式ですけど、松山市の記録が練習中に出たりして、まあ陸上部にはいったらいいなあと思っていました。友達で剣道やってんのが二人いて、やらないかってことで、私が始めたのは寒稽古です。「○○君いこうや。」と言って、

朝迎えに行き、中学校三年間よくまあ稽古をしたものだと思います。そのかいあって、まあ二連続スポーツ少年団の全国大会で優勝して、日本一になりました。本当は六コートあるので六つ優勝しているところがあるのだけれども、ともかく優勝したっていうのは地元に帰って新聞とかテレビとかにだしてもらって、その感触が非常にいいものです。強くなれば新聞にもテレビにも出れるっていう感覚でした。それから新田高校へ特待生として進学しました。

新田高校での練習は話では厳しいと聞いていたんですけども、ここまで厳しいとは思いませんでした。特に一年生は一番下ということで一年間苦しい思いをしました。離れて行った連中も数々いたんですけど、なぜやめなかったか、それは特待だったっていうプライドがあったからだという気がします。一年も辛抱すれば後輩が入って来ますから、一年間の辛抱ということとプライドだけで「やめたい、やめたい」とは毎日思っていたんですけど、何とか続けられました。やめちゃうと月謝払わないとあかんし、親孝行もできないから、まじめにして、やっと二年生になりました。これから少しは楽になるというときに、これまでずうっと剣道部を指導されていた先生が病で倒れて亡くなりまして、二年生のとき新しい先生がはいってきました。先生が変わると当然指導方針も変わって、前の先生のときは一年生は非常に厳しくて三年生が非常に楽という感じだったんですけど、次の先生がきたとたん三年生が非常に厳しくなって三・二・一と一年生がお客様になったんです。そうなると今度は一年生がお客様ですから二年生が雑用をすることになって、三年生になると今度は練習が一番厳しくなって、楽な時代がまるでなかった高校でしたね。まあいいメンバーがそろってましたので、インターハイを目指そうと真剣にやりました。この時期は自分でも一生懸命に剣道をやっていたと思います。

インターハイ県予戦決勝のこと

稽古が終わって帰ってくるのは夜遅くなってましたが、それからもういっぺん三キロくらいのお城山というところへ家から走って往復しました。高校二年の後半から一年間自分に課題を課して走りこみました。何が何でもインターハイに行って優勝するんだという目標を決めていましたから、そんなに苦痛には感じませんでした。そして二年の秋から私らのチームは負け知らずで「絶対インターハイはとれる」そういう気持ちで試合に臨んでました。

三年生の夏の県予選。準決勝まではスムーズにきたわけです。で決勝戦の相手も新人戦で五－〇でたたいている相手なので負けるはずがないと思っていた。私の中では…。いつも負けている先鋒が勝ったりしたものですから、ちょっとリズムがくるったのかもしれないけど、まあ先鋒が勝った。次の次鋒はとられた。まあこれくらいはよしよしと思っていたら、常勝の中堅がころんじゃった。そうなると、大将戦になる。まあ大将戦になるのはしょうがないと思ってました。そして副将が勝って、大将戦にもってきてもらったんです。

まず、私が面を一本とりました。相手はすでに場外に二回出ていました。(※その当時は、場外反則三回で一本のルール)あとひと押ししたら場外反則三回で一本でしたから、まあちょっと押してもよかったんですけれども、私の性格では真ん中に引っ張って来ておいて打ちすえなあかん、反則なんかで勝てるかっていう性格でした。それが不幸をまねきまして、一本勝ちでもよかったんですけれども、二本勝ちせなあかん、なおかつ面でとらなあかん、と非常に欲張りな感覚をもっていました。そして、面をガンガンガンととりにいったんです。ガンガンと追い込んでいったときに相手は苦しまぎれにパッと小手をうって小手を拾われたわけです。あーあかんと思ったわけですが、それですぐ延長戦に入りました。延長戦に入って、それでもまだ負ける気がしません。絶対勝てると思っていました。

延長戦に入ってかなり時間が過ぎて、みんながもつれてきたなというふうに思ってたようです。たまたまパンと引き面をうったやつが、その時決める意志がなかったんですが、パンと当たったもんですから、決めにかかったんですね。〝メーン〟といって審判にアピールしてたんですね。で〝面〟というてたところを〝胴〟って打たれて、その引き胴に審判の旗があがって、インターハイを捨ててしもうたんですね。

私はその時、あげてた竹刀で〝バン〟と床をたたいてしまったんですね。その試合後、今も新田高校の先生である私の師匠からは、床をたたいたことだけ、一言注意されました。負けたことは怒られませんでした。「そういうこともあるよ」って言われたものですから余計にカッとなって、涙がでそうになって、泣きたくなったんですけども、後輩が先に泣いているものですから、泣けないんですね。慰める側にまわらないといけなかったのです。「いやいやお前のせいやない」と慰めてそのときにね、「お前やないよ俺が泣きたいんだよ。俺にはもうインターハイはないが、お前はもう一年あるやんか」って頭の中で考えて、そういう気持ちだったんです。それで、家に帰りまして、一人で、親の前で泣くのはみっともないですから、お風呂の中に潜って「わんわんわん」涙がかれるまで泣きました。その思いがやっぱり今までずっとあります。苦しくなった時にそれが必ず自分の中に出てきます。あの時のあの悔しさってのが、今の私の剣道をやる原動力になっているんです。

大学に入って

大学は、松山商科大学(現在の松山大学)に世話になることに決めました。そこで、最初、剣道部を見にいったんですが、先輩に悪いと言えば悪いんですが、我々が新田高校で三年間築いたものに比べれば、なんて甘い剣道をやっているんだ、こういう大学生がいるんだろうかと思いました。ですから、大学に入学しても、最初剣道部に入らなかったんです。で、一週間くらいたって、ある先輩から連絡がありまして、「大城戸、飯でも食わんか」と言って焼き肉を食べにつれてってもらったんですが、その焼き肉がうまかったのです。当時のことですから、今のバラとかロースとかはありません、よくても豚バラです。だいたい「かしわ」でした。非常にそこの「かしわ」がおいしくて、食いながら入部の誘いにうなずいてしまいました。

幸い、一年の時から試合に使ってもらいました。入学した時の勢いがありまして、中四国で個人戦で優勝してしまいました。すぐ天狗になる性格なんですけれども、一年生で優勝したことでもういっちょ天狗になってしまいました。意気揚々と全日本選手権へ行ったのですが、全日本の試合ではまだ一〇年早いっていうふうな気を持たされ、帰ってきました。

ところで、剣道にもライバルがいたんですけれども、柔道部に一人いいのがいまして、その浜田と仲良くなりました。現在、全日本の女子のコーチをしていて、柔(やわ)ちゃんなんか

を教えている男なんです。私の剣道に対する考えと、こいつがもっている考えかたと非常に差があったんですね。一つのことに対する姿勢ってのが違っていました。そいつを見ているとだんだん自分が恥ずかしくなってきました。飲みにも行くし遊びにも行くんですが、きちっとけじめのつけられる男なんですね。遊んで翌日つらいから休むとか、遊びに行くから今やっているトレーニングを中断して行くとか一つもしない。トレーニングをきちんとしてから遊びに行く。で、夜遅くまで遊んでも朝はきちんとやるというような、そういうけじめのしっかりしたやつでした。私とは違って、ちょっと自分に甘い、酔い潰れたら、次の日は体に悪いからやめとこうとかいうふうなことはありませんでした。彼がやっているトレーニングというのがまたこれがすさまじいもので、これにならってやらないとだめだろうと思いました。

また、全日本のレベルの違いを感じていましたし、やらんといかんということで二年、三年と全日本大会に出場するごとに試合の結果は出せないんですけど、だんだんと自分の力が全日本のレベルに近づいて来ているんじゃないかと……。四年になる前に、今まで関西に遠征に行っていたのを関東へ行こうと思いました。私には高校時代の後輩で関東の方でばんばん活躍していた奴がいましたが、彼らとは夏休み新田高校で稽古していましたから、関東のレベルはだいたい感じていました。しかし、部員みんなを連れて行ってどんなものなのか、どのレベルにうちの大学がいるのか体験をやっておこうということで関東へ行ったんですね。まず、国士舘にお願いしたわけなんですけれども、「お前とことやったら、ウチの一線級は出さんかもわからんぞ」って言われまして、そんな失礼な大学には行くことないわってことで、早稲田、法政、中央の三校と対戦して帰って来たわけです。で、その時はもうほとんど差はないんじゃないかと感じたわけです。練習内容も変わらない。逆に、商大はトレーニングをやっていましたから、練習量は多いんじゃないかなと感じていました。関東も関西もそうたいしてこわくないと、三年生の終わりに思ったわけです。

四年生の時、全日本学生選手権大会で、中四国の代表として初めて優勝できたのですが、大会が終わってみて、中四国の予選の方がきつかったなどの思いがあります。

同じ人間なんだからそんなに差はない

一年、二年でダメだったのは、後でよく考えてみますと、一年坊主で出ていって、四年生と試合すればそりゃレベルの違いを感じますよね。それがだんだんと自分が上になって行ったら同年代になるんですね。「同じ人間なんだから、そう差はない」ということです。大学卒業して、警察に入り、全日本のトップクラスの連中とは常にそういう考え方で対戦していました。警視庁にすごい先生方がいるんですけれども、その先生と稽古するときに、ほとんどさわらしてもらえないんです。けれども最後に一本いいところが打てたんですね。で、またほかのすごい相手にも一、二本いいところが打てたのです。で、私にも一本か二本はいいところが打てる、そうするとどんなに強い人とあたっても、その一本か二本が試合の時に先にでれば俺の方が勝つんじゃないかなと、そういう考え方を持つことができます。いまでもそうです。後で一〇本打たれようが、私の一本が先に打てれば試合には勝てるわけです。だから、気後れしないって事が大事なんじゃないかと、そんなふうに思います。

世界大会のこと

二七歳ぐらいの時に試合に勝てない時期がありました。世界大会の候補選手に入れたのです。世界大会の二年前から、全国から三〇人選んで、一年間合宿して一〇人振り落として、新たに一〇人加えて、一年間やって一〇人振り落とす。最後の一年間で三〇人から一二人にしぼる。今振り返ると、この一二人の中に残るための三年間っていうのが、私にとって非常にいい経験になったと思います。ものすごい重圧の中で、剣道をやるっていう経験はもうおそらく二度とないでしょう。本当に苦しい二年間でした。最終選考会の時に、ちょうどおやじが亡くなったものですから、がたがたになって、三勝九敗で試合を終わりました。それが、合宿の最終選考ですからこれはもうあかん、落とされたと思ったんです。しかし、本当の最後の最終選考は全日本選手権だと監督にいわれました。世界大会にでるためにはまず、全日本に出なあかん。出られなかったら、それでもう私はダメなのです。なんとか全日本に出て、準決勝まで残り、三位になりました。これでメンバーに入れてもらうことができました。

入れてもらったのはありがたいんですけれども韓国（ソウル）入りしてから、チームリーダーの警視庁の遠藤先生からお話がありまして、「大城戸、お前危ないよ」って言われたんですね。過去の例からいきますと個人戦が七名、団体戦が五名全員出てる。「今回は、どうにも勝たなあかんから西川と岩堀をダブらせたいんや。その余り二名の中にお前がいる。」「先生それは勘弁してくださいよ。松山で世界大会出てくるからって何百人も集まって壮行会やってもらって、餞別までもらって、がんばって来ますって出て来たのに、試合をせずに、手をたたいて来ましたって報告できますか。試合させて下さい」とお願いしたんです。しかし、ソウルに入る合宿の前から選手発表がない、ソウルに入ってもない。試合の二日前になってようやく発表があり、個人戦の四番目に名前があって本当にほっとしました。勝負に勝とうとか負けるとかそうじゃなくて、とにかく試合に出られるというだけで満足していました。

団体戦の方は、力的にも日本のほうが随分上ですけれども、本当に韓国が強くなっていましたから、試合になると万が一がある。あの雰囲気の中で、みんな日本をつぶしてしまえっていう観客しかいないわけですから、そういう中で試合をやった一二人は、今でも心はひとつという感じなんです。

けれども、本当にすごい所だったですね。これから日本に対する感覚はだんだんと変わってくれると思うんですけれども、まだまだ過去の過ちのことが根強く残ってて、日本人に対する感覚というのは、私らの想像を絶するものでした。

個人戦になって、日本が一番期待していた西川選手が、一発目で韓国の選手に敗れまして、それから、私と同じコートにいた熊本の亀井選手も韓国選手に負けまして、どないなるんやというふうな気がしました。三回戦で岩堀選手も韓国人選手に潰されるし、日本勢がだんだんと韓国勢に潰されていました。私の予定は、こちらから私が上がって、あっちから亀井さんが上がってきてベストエイトで当たる、たとえ亀井さんに負けても俺はベストエイトだなということでした。そこへ亀井さんじゃなく韓国選手が上がってきたんですね。もう一つ前も韓国選手が上がってきたもんですから、韓国人二人と自分が当たりました。そんなに難しい事はないんですけれども、

第７回世界剣道選手権決勝で大城戸選手の初優勝が決まった瞬間
（剣道時代 1988年８月号）

格の違いを見せようとしたら、ちょっとしんどいから、さあこいって感じでやりました。日本人同士でやっているくらいの試合をやっていればそんなに難しい相手ではないんです。しかし、そこは世界大会ですから、日本の剣道を見せながら勝たないとだめだ。そこのところがなかなか難しいところで、気持ちで勝負を落とすものが何人か出て来たわけです。準決勝へあがれば、あとは日本人二人でした。北海道の林選手がよく韓国のエースに勝ってくれて、準決勝・決勝とも日本人になり、本当にリラックスして、たまたまいい結果になって優勝できたんです。優勝したあとは、家族も来ているもんですから、記念撮影とかやりたいわけですね。しかし、前日の団体戦の時に、判定をめぐってかなりもめたんで、国民の感情を抑えるために国旗掲揚をしてもらえませんでした。で、記念撮影もなし、危険だということで、逃げるようにしてバスに乗り込んで家族の人も危ないということで、ホテルで記念撮影をしました。非常にさみしい個人戦優勝であったんです。

考え方で変わるものがある

剣道は気持ちでかなり流れが変わって行くもので、力があっても半分しか出せなかったりということがあります。自分たちが鍛えた技術を出すために、心の方も鍛えないといけないっていうのが難しく、奥の深いものなのですね。私も中四国の大学のＯＢですから、中四国のレベルをあげたいっていうのは、大塚先生も山神先生もみんな同じじゃないかと思っているんです。いくら先生達がそういうふうに思っても、あなた達がやらないと意味がないんですね。ここにきている人達にリーダー的な役割をしてもらって、やれるというプラス思考の考え方をしてもらいたいのです。私は特別な人間じゃないんですし、どこにでもいる普通の歌って踊れるオジさんです。しかし、本当にちょっとした考え方や、人よりちょっと努力をしただけでも、すごく変わっていくものだと実感として思います。

例えば、あなた達の中の広島大の森川君が今年全日本の学生選手権で優勝したとします。森川はすごいなっていう感覚をもつかどうかですよね。あいつがいけるんならオレもいけるんじゃないかなって思ってもらいたいんですね。そうなると変わってきますね。「あいつはもう昔からすごかった」そんなやつはそういないですよ。だから、身近な奴が一歩進めば進むほど、自分たちもそういうチャンスは必ずくるんだっていう意識をもって下さい。勝つためだけに剣道をやっているわけじゃないんですけれども、どうせやるなら勝ちたいじゃないですか。大学の四年間なんていうのは、一生懸命剣道ができる時期ですからね。余計なことを考えずに、当然遊びもせなあかんし、いろんなことを勉強せなあかん。でも剣道はできるわけです。要するに、あなた達のなかで、剣道がどういうポジションを占めているのかですよね。

「俺にとって剣道って何だろう」、そこをもう一度考えてください。それは、個人個人によって剣道のとらえ方は違うと思いますけれども。

世界は心の時代になってくる

さっき倉知先生が剣道のイメージがよくないとおっしゃってましたけれども、これからは絶対、剣道はよくなります。華やかなＪリーグを横目でちらっと見ながら、汗臭い面と小手をして、体と心を鍛えているあなた達を見ていて、将来は安心だなって、外国人はそういう捉え方をしています。ただ、その数が減っているのが少し心配ですけれども。文明ばかりを追っていった中で、今、アメリカやヨーロッパ辺りの人間は行き着くところまでいってしまったんですね。で、あとなんだっていうと今度はマインド・心になってきます。これからは、心の時代だって事をアメリカやヨーロッパでは考えていると思います。で、そこで心をどういうふうに鍛えればいいかなってことで、日本にある武道がいいんじゃないかなって、そういうふうに考えるんじゃないかな。

今、みんなの中に、剣道っていうのがどこに位置するのかなんです。健康を維持し、体を鍛えるためだけのものですか。就職を優位にするためのものなのですか。本当に自分の一生を鍛えていくものなのですか。自分の人生をより良く生き抜くために、剣道修行するのだというポジションにすれば、大学を卒業して、社会人になっても、剣道を続けていくことができるはずです。そこへこないと大学時代の剣道で終わってしまいます。

剣道できる環境はそろっている

日本の剣道人口が減った減ったといいますけれども、竹刀の音が聞こえない町っていうのはないんです。後輩や、企業に勤めている人が全国を転勤したり、県内を転勤したりして感じたことなんですけれども、「先輩、剣道っていうのはおもしろいですね。竹刀の音のしない町っていうのはないんですよ」と言っています。剣道できる環境はそろっているわけです。それをやるかやらないかっていうのは、これから、卒業していく人達の心がけ次第じゃないかと思います。自分の中で剣道のポジションっていうのを決めて、そのポジションをいいところにもっていくようにしてもらいたいと思うんです。やればやるほど、かめばかむほどわかってくるようなそういう剣道、――おいしい味のあるものをせっかく小さいころから始めたわけですから、大学だけを節目にしないでやっていってもらいたい。そういう覚悟ができると、今後の練習にたいしても取り組み方がおそらく変わってくるんじゃないでしょうか。気持ちひとつでいろいろなことを良くすることができる、という考え方で物事にあたってもらったら、非常にいい結果が出てくるんじゃないかなと思います。

なんか本当に取り留めのない話になってしまいました。しかし、こういう講習会をやるということはいいことで、私らの時代にはなかったことです。私らの時代にこういうのがあれば、もっといい仲間作りとか組織作りができていたんじゃないかなと、君たちは、いい時代に生まれてきたんじゃないかと思います。

何でもそうなんですが、出てみないと有り難さがわからんとか、失くしてみないと有り難さがわからないものです。しかし、一番いいのは、もっている間に有り難さがわかったり、在学中に有り難さがわかったりするのが一番いいのです。とにかくいろいろな人に感謝しながら、大学でしなければならないことをそれぞれにきちんとやっていってもらいたいのです。

●第二回リーダーズセミナー講演

剣道の思想とロマンチシズム

○高知大学教授
大塚忠義

おおつか・ただよし
7段教士・高知大学教授
安房高等学校・東京教育大学卒業
全日本学生団体優勝

大城戸先生と倉知先生が話してくださったのが、チャンピオンに向かって苦労や努力された技術や修練やトレーニングなどのリアリズムの話とすれば、僕がこれから話をするのは、ロマンチシズムというか、夢というか、我々は何を求めて剣道をやっているのだろうか、友情だとか、勝利だとか、健康だとか、ダイエットだとか、人それぞれには目的があったり意義があったりするんだけれども、そもそも剣道というのは、社会に生まれてどのように発展してきたのか、というあたり、つまり、剣道というのは、そもそも何なのかという断片を話してみたいと思います。

剣道が生まれた一七五〇年から、もうじき二〇〇〇年になる、その間の約二五〇年の話をしようと思います。今までの二五〇年間くらいの剣道の歴史、特に有効打突・一本ということについて、どのように変わってきたのか、人々は延々と剣道をやってきたわけだけれども、その中身はどのように変わってきたのか、終始、何を求めてきたのかというそのあたりを話してみたいと思います。

有効打突にはロマンが内在する

現在の有効打突の条文では、『有効打突は充実した気勢、適法な姿勢をもって』という抽象的な前文と、『竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるもの』とした具体的な後文で構成されています。有効打突は、適法充実、正確確実な打突というような表現になっているのであるけれども、前文は基準のない抽象性を表しています。これは「できるだけ充実した、できるだけ適法な」ということを表していて、いいかえれば、「よりよい打突を目指していこう」という思想を表現しているのです。

「できるだけより良い」「できるだけ気持ちのよい」打突は、前文の充実したとか、適法だとか、これは言ってみれば「美しい空」だとか、「きれいな花」だとかいうような、美意識的感性というか、感覚的な抽象的な言葉で表されているんです。昨夜、大城戸先生の話で負けた話がありましたね。インターハイ県予選で、場外をもう一回繰り返せば勝てるんだけれども、大城戸先生のプライドとしてはそんな手段で勝ちたくない。よりよいものを求める気持ちがあって、『面でとってやろうというように思って引き面を打ったら、残心中に引き胴をとられてあえなく負けて風呂で泣いた』というような話は、極めて象徴的ですね。

名人技としての擦り上げ面のパパーンといく、そういう技を練習すればするほど、気持ちのいい見事な一撃、打ち方をめざして自分の感性が豊かになっていく。そして地稽古のなかでも、よりよいものを打とうとする反復練習の中で我々はロマンチシズムというものを育てさせていってます。このことをもっともっと世界にも、日本の人達にも伝えたいものです。私たちは、単に棒振りで当てっこをしているのではない、より良いものを創造しているんです。そういうところに剣道の文化性とも、歴史性ともいえる知恵が込められているんです。『剣道の先達がやって来た知恵が「一本」に入っている。それをもっと確認しようじゃないか』というようなことが私の結論です。

三本と五分。時間性と得点性の混在

ところが現在では、それが発現しにくい状況になっている事情があります。先程述べた、適法、充実、美しい空、きれいな水、というようなロマンを、感受性のようなものを、美意識みたいなものを多く含んでいる、その有効打突を争う試合のルールは、三本を争う、いわゆる「先取二本」です。原則的には、三本で五分というようになっています。五分という時間制の中に、得点制が入っています。得点と時間制が両方ある勝負のさせかたというのは、普通のスポーツでは見られません。柔道が最もこれに近い五分とか、一〇分とかいう時間の中で一本を争っている。普通は、バレーボールなら、一五点の得点を争い、時間は何分でもかまいません。サッカーは四五分という時間を決めていて、その中で何点取ったか争います。だから、普通でいうと時間制か、得点制か、どちらかです。しかし、剣道の場合には、得点と時間がリンクして、五分の中で三本勝負をやるというようになっています。

全日本の八〇%が一本勝ち

今年の全日本選手権では、ベテランである西川さんが見事優勝を果たしました。全日本の戦後の試合をずっと調べたら、試合は、一本勝ちが八〇%前後あり、一本勝ちと延長戦が非常に多い。そのうえに、平均して試合時間は七分以上かかっています。極端に言えば七分かかって一本が出現しているわけですね。そもそも三本をやりとりをするならば、もっと短い時間の中ででてくるわけだけれども、今のように高度に洗練された選手達が争ったときには、一本を取れば、ほぼそれで時間がきてしまって負ける。もしくは、たいていの場合、延長戦に入り、その中で一本が決まっていく。このように三本まるまるの勝負というのは学生の試合の中でも少なくなってきている。もう一つ例をあげれば、優勝した宮崎選手がこのような話をしました。ある雑誌で「勝負のためには、一本取れば時間を待つという戦術だって有り得る。それを大先生たち

は積極性がないとか、攻撃的でないとかなどと言いますが、それは後で聞く話で、とにかく勝つためにはその時間を有効に、つまり、時間を戦術的にというか、一本取ったら時間がくるのを待つ。そこのところは割り切っております」というようにも座談会の中で話しています。そして、「その試合が終わったら、もう一度、自分の求める剣道をやります」というようなことを言っています。

二分や三分の延長戦が何度も繰り返されても結着がつかないことがあります。そんな時は、見ている者も試合を行なっている者も、これからは軽くても取って試合を終わらせる可能性がでてくるなと予想することでしょう。審判のほうも何度も延長を繰り返していくうちに、まあ、この辺りで取ろうかなどと思うことも不自然ではありません。そのなかでどういう技の応酬が繰り広げられるかと、いい技を取ろうと思っていても、時間枠が長引いていくと、このへんで勝負を決めなければ、試合の全体のレベルもあるし、観客もいるしね。そのような感じで、早い話がこれからは軽くても取りますからというふうになってしまいます。

選手の心構えのせいではない

五分三本という時間枠の中で、勝負が熾烈になっていくと一本勝負化し、時間が長引いていきます。その中で、本来、適法だとか充実しただとか、より良い気持ちのいい打突と求めてきたにもかかわらず、勝負決着の方法としていうと、どうしても充実適法というよりも具体的に当たったか当たらないか、姿勢がどうの態度がどうの、見事な一本がどうの、崩して相手の心理を予測してパーっといくそういうものを削らざるをえません。この時間枠と得点制の中で、勝負決着のために、軽くても取りますよ、当たれば取りますよ、という具合いにして、そのような夢みたいなものが削られている。

そこが私は今日のルールがもっている、矛盾・問題だと思っています。これまではそういうことを試合者が勝利に走りすぎるとか、勝負心が旺盛すぎるとか、いたずらに技術の末に戻るとか、そういうようなことで、試合者の責任にしている考え方がありました。

「勝負心が強すぎる」「そうじゃない、剣道はもっと心を磨くものだ」「修行なんだ」ということで「見事な一撃を求めろ」そう言って選手の責任にしていました。言わば、選手が勝利主義に走り過ぎるという言い方で、なんとかカバーし、まっとうな小手先の当てっこでない剣道を求めようとしています。しかしそれも、なぜそのようになっていくかと考えたら、三本を争わせる得点制と、五分という時間制との矛盾があります。そこで、もともと求めるべきロマン、あるいは美意識旺盛な品位風格のうんぬんと言われるそういう中身が、当てっこにならざるを得ないというわけです。

こういう枠組みがそうしているんだから、試合者を責めても仕様がないんです。全日本の選手達、あるいは、チャンピオンになった方々が、試合の内容に関して酷評を受け、選手の責任にされていることがよくあります。そういうようなあり方は非常におかしいし、腹立たしいものだと思っています。

私はよく相撲をTVで見ますが、相撲をやめていった人達が、解説をしたり、審判をしたりしています。横綱や、その場所の優勝者に対しての評価をきくと、とても剣道では真似のできない、非常に丁寧に若い力士を誉めています。「よく稽古した、よくこのように上手になった、強くなった」と。しかし、剣道の場合は、勝ったにしても注文が多いし、酷評されます。大体、『剣道時代』『剣道日本』などの雑誌を読めばわかるように、勝った人に対して辛口なんですね。辛口な評価、酷評、観戦記などを見ればそうなっています。

そのように、試合者の責任のようなものが多く言われますが、実際にはルールの矛盾から、一本勝負になりがちだし、時間が長引きます。熾烈な戦いであるから、技を出すのをひかえて、ここだというところで打って、それでも決まらなければだんだん時間が長引いていく……。

もう一つ例を挙げてみますと、今の全日本の決まり手は、面が四五%、胴がわずか三%、小手が五〇%と上がってきています。つまり、小手技が多くなって、横軸空間を使う胴が少なくなって、突きは皆無。

大城戸先生の話ではないけれども、どちらかというと小手よりも、面でスパーンと取りたいというのが我々の気持ちですよね。小手というのはどちらかというと小さな空間でスパッというように、あるいは出小手で取っています。小手には小さな空間で俊敏に取っていくという美しさはあっても、ダイナミックな、言わば、空間の広さを感じさせるような、外から見ていても、なるほどといわせるものはやはり面です。しかし、今のところ、面の割合が五〇%から落ちて来ています。反対に、小手の割合が上がって来ていて、空間が小さくなってきています。

「技」は自由な世界を拡げてゆく

普通のスポーツ技術は、上手になればなるほど、より大きな空間をつくり出します。例えば、背面跳びでいえば、より高く人間を運ぶ技を開発していきます。あるいは速く走るという走り方をトレーニングすることで、短い秒数で一〇〇メートルを走るということです。水泳も同じです。技が上手になるということは、空間を広げるということです。それが楽しいということは、手が伸びて所有するところが大きくなるということです。技は、自分の自由性を拡大して行く世界といえます。そのように、技術が果たす役割があるのです。

しかし、全日本の大会では、一本が出現しにくく時間が長くなり、決め技は小手が多くなって、空間が小さくなっています。こういうところで全日本はあまりおもしろくない。みんなはどうですか。全日本を楽しみに見ていますか。私の学生からいうと、楽しみにするというほどではない。空間が小さくなっている、時間が長くなっているという中で、どうも剣道の試合というものは面白くないというようになっています。先程も言ったように、それが選手の責任になっているけれども、こういう構造の中で生まれているんだということを言いたいんです。

よりよい一本を保証できるルールを

それではどのようにしたらこの問題が解決できるでしょうか。まず、有効打突が得られる環境と早急の改革が必要です。私は、三本勝負を残して時間制を撤廃すると良いだろうと思っています。つまり、試合はどちらかが二本取るまで時間は無制限。要するに、バレーボールで、どちらが先に一五点とるか、時間制限がないと同じに、剣道の場合は二本先取、時間は無し。しかしそれでは、すぐ皆さんから反論が出てくるでしょう。時間がかかって仕様がないのではないか。大会運営が困るのではないか。大会の終わる時間がわからないというふうになるから、それでは困るということになると思うんです。

試合空間は現在一一m×一一mの正方形で

やっていますが、それを三m×七mに縮小して、熾烈にそして逃げられない空間にしてみます。稽古する空間というのは、今日みんなが練習しているみたいに、たいてい細長い空間の中で稽古しています。そういう三m～七mの限定された空間だと逃げ場がないから、三本勝負時間制限なしでも、早く勝負がつくでしょう。さらに熾烈な戦いができるだろうと考えています。つまり対向軸が一一m×一一mだと、ぐるぐる回って相手をつかみにくいけれど、三m～七mでは対向軸が動きにくいです。しかし、学生としては打突も残心も勢いがあるから、技も出しにくく、すぐ場外に出てしまうでしょう。そこで、今度はもうひとつ空間を設けます。あたかも柔道の赤畳のような線です。そのゾーンに出たらすぐ戻らなければならない。ゾーンまでは打ち込んで出てもいいけれども、その外には出てはいけない、というルールを作ってみてはどうでしょうか。

何でこんなことを考えるのかというと、全日本のように、日本のトップの大会が、一本勝負化して時間が長くなり、しかも、小手の打突が多くなっています。そして、剣道人たちがより良い打突を求めてきたにもかかわらず、こういう仕組みの中では、発現しにくくなって来ていますから、何とかその思想を維持したいし、発展させたい。剣道の世界をもっと広げたいということを考えているわけです。

特に、韓国の問題があります。日本は韓国に、日本の柔道がそうであったように、近い将来負ける日が来るのではないかと私は思っています。柔道は、オランダのヘーシンクという人に、日本の神永という人が負けたんです。それ以来、日本はルールを我がものとして改善したり、改革したり、できにくくなっています。その結果、日本の柔道は一本を大事にしたいと思っているのですが、世界のルールでは効果というところまで細分化してしまいました。技あり・有効・効果というふうに、勝負決着のために一本を求めるというのではなくて、勝負決着の合理性を求めていった結果です。私は、そういう柔道の二の足を踏みたくはないと思います。

国際化の時代

「韓国に、団体戦では勝てるだろうけど、個人戦ではわからない」なぜそのようなことを言うのかと言いますと、韓国の高校選抜チームが来たときに、日本の三都県、東京、神奈川、山梨の連合軍がそれぞれ戦ったわけですが、結果としては日本チームが勝っています。しかし韓国の勝率は、勝ち三四%、負け四一%、引き分け二五%、と日本に接近しています。驚くべきことは、総得点三七三本中、韓国は一六八本、つまり四五%をとっています。四五%の本数を取りながら負けているというのは、二－一で負けている割合が多いということです。負けてはいるが、総得点の四五%を取っているということは、相当なものです。

『剣道時代』という雑誌に、松原という先生が、韓国を訪問した特集があります。韓国では剣道は陸軍や警察で採用されていると聞きます。しかも、韓国が日本に追いつき追い越せという点で、極めて高い意欲で剣道を学んでいて、その上、スポーツに報奨金という制度があります。さらに、日本への留学もあり、東海大学、国士舘というところに留学できるという可能性もあります。彼らが、国内で勝って報奨金を手にリクルートシステムで日本へ来て、国士舘でいわば生活をかけて練習をします。今後の生活を含めて自分の生活の向上や安定というものがかかったときに、どれくらい努力するものかというのは、恐るべきことだと思います。その人たちが、世界選手権の中で、既に日本の選手達が、格の違いをみせようとしたときには危ないことになっています。私は、今の体制が維持されるならば、後五年～一〇年の中で、韓国の選手が、個人戦で勝つ可能性が出てくるのではないかと思います。

日本文化としての剣道を確立して

日本の中では、立派に一本取っても、もう一本取りにいくんだといった美意識をもつこともできるし、心の中でその思想をもつこともできます。しかし、韓国の人達がそのような美意識をもつかどうか。このままのルールでいけば、先程も言ったように、日本の中でも得点の志が削られるようになっています。この状況がこのまま国際ルールとして使われるならば、一本に込められた日本剣道の思想は見えにくくなっていきます。それが世界のテレビで放映されたとき、それが『日本の剣道』ということができるだろうか、というのが、私の危惧するところです。だから、日本の剣道の形、剣士たちが打突にかけた願い、ロマンチシズム、そういうものを世界の皆に知ってもらわなければならないと思います。

それは、国内の問題を解決することでもあるのです。今までの国際化というのは、正しい剣道をまず教えて、「質を確保してから量へ」だったけれども、物事は「量を満たしてから質を求める」というのが私は自然であると思います。また、韓国の指導者がイタリアでも道場を経営しています。もちろん、イタリア人たちは、日本の指導者こそ本家本元ということで、尊敬の念を表してくれます。「韓国の剣道はどうも」などと言ってくれるけれども、彼らは道場を経営しているのだから、日本人だけが指導者ではないのです。

こういうことを含めると、背後にある思想をきちんと表現できるような時間制、本数制、空間などを考えていかなければなりません。注意深く考えないと、一本が見えなくなり、勝負がつけばいいのだというふうな柔道の二の舞に成りかねない。つまり、剣道の思想性や文化性というものが見えにくくなってしまいます。しかも、後五年内には実際に起こり得る、と予測される、日本が試合で負けたときに「実は、日本の剣道は一本を大切にするもので、この中には思想性があり、美学がありました」といっても、それは、負け犬の遠吠えとしか取ってもらえないでしょう。また、「段級審査では、段級審査の剣道」「試合では、試合の剣道」このように引き裂かれているのもまた、このような構造の中にあるのでしょう。段級審査では、日本の高い思想性というものをみているし、一方では、これをみているにもかかわらず、こういう構造のため、試合中の評価と段級審査の評価が変わってしまいます。

私は、極端に言うと段級審査にあるような、そういう中身をもって勝負が堂々と繰り広げられるということを考え、統一するべきだと思います。今のルールそのものは、そう根拠のあることではなく、戦後の剣道が復活して来た過程で作られたシステムで、極めて便宜的なものの考え方で作られたものです。その当時、「剣道の思想性」なんてものをいうことができなくて、スポーツ化、スポーツ化という中で作製されたルールなので、もう一度そこのところを、見直してもらいたいと思います。それによって、剣道の技が花開いて行くと確信しています。

国際交流への取り組み

岡山大学剣道部の国際交流（ドイツとの一例）

岡山大学教授　小倉　肇

交流の背景は、一九七二年ドイツ国費留学生に選ばれた私が、先ず全日本剣道連盟に手紙を出したことに始まりました。

「もしドイツで剣道をやっているなら剣道具を持参したい……」

この手紙は当時の国際剣道連盟事務局長・笠原利章氏に廻されました。氏によれば、当時のドイツでは二つの剣道グループが主権争いをしており、なんとか一つにまとめたい由。面談の末、私はオルグ役としてドイツに渡り、剣道グループと接触を持つ事になりました。

長い時間をかけての話し合いの後、ドイツ人を中心とするドイツ剣道は一本化され、国際剣道連盟に正式に加入しました。私はドイツ剣連の顧問として、講習会・合宿・世界選手権を含む各大会へ参加して指導を行ないました。約五年間の留学を終えて帰国してからも関係は切れることなく、札幌での世界選手権大会後にドイツ選手団は岡山を訪れましたし、毎夏休みにはベルリン大学生を含むドイツからの剣道修業者は短期間ホームステイして稽古に観光にと時を過ごしました。

その内にベルリン自由大学にも剣道部が創設され、若い人達が剣道をするようになりました。ドイツ剣連ではこの若者達に良い刺激を与えるために、日本から大学剣道部員を短期（約一か月）招いて交流させることを決めて、岡山大学へも打診してきました。招聘条件としては①滞在費はドイツ負担で、剣道を

剣道通じ東西交流を

岡山大チームが西ベルリン遠征

剣道を通じて東西交流に一役―。岡山大剣道部（部長・脇本和昌教養部教授、部員六十人）は、東西ドイツを隔てていた「ベルリンの壁」が開放された西ベルリンへ三月に遠征、現地の大学の大学生やドイツ武道連盟の剣士らと交流を深める。

民主化の波肌で

小倉肇団長

同剣道部の海外遠征は昭和五十四年三月の米国サンノゼ市に次いで二度目。団長を務める剣道部副部長の小倉肇同大医学部助教授が約二十年前、西ベルリンの国立コッホ研究所に留学中に剣道を教えていたボルフガング・デムスキーさんがドイツ武道連盟剣道部の部長であることや、西ドイツがフランスと並びヨーロッパで指折りの〝剣道国〟になっていることから、部員らに民主化の波が押しよせる現地の情勢を肌で感じてもらい、国際人としての自覚を促そうとのねらい。

メンバーは、小倉団長をはじめ監督の杉本八郎同大非常勤講師、梅木達士教（経済学部三年）ら選手十七人（男子十一人、女子六人）の計十九人。三月八日に岡山を出発して九日午後、西ベルリンに到着。西ドイツには一週間滞在し、西ベルリンのベルリン自由大学の学生やドイツ武道連盟剣道部の剣士たちと親善試合を行う。

来月出発　竹刀など東欧へ寄贈

また「東欧諸国には剣道の道具がほとんどなく、西側で買おうにも高くて手が出ない」（同連盟）状態。このため四月十四日、西ベルリンで行われるヨーロッパ剣道選手権に出場する東欧の選手に同連盟を通じて竹刀や剣道衣など剣道に必要な道具を寄贈する。

小倉団長は「剣道部OBの協力などもあって今回の西ベルリン遠征が決まった。揺れ動く世界情勢を学生に見聞してもらうとともに現地の人たちの間に日本伝統の剣道を浸透させ、相互の友好関係を築いていきたい」と話している。

する若者の所で生活を共にする。②四段以上の力があり人物も優れている者で、国士舘大学・国際武道大学・岡山大学の剣道部員であること。

学生が剣道を通じてヨーロッパを知る絶好のチャンスで、若い時の感動経験は何ものにも替え難いことなので喜んで学生を送ることにしました。一九八九年二月から三月にかけて約一か月の間、男女学生各一名をベルリンへ派遣したのが最初です。その後毎年希望者一～二名を希望する都市へ送り出してきました。一九九〇年には、岡山大学剣道部学生一七名と共に、ベルリンの壁が崩壊した激動の地へ遠征を行ないました。日本の伝統文化である剣道は、今や世界の武道になっており、ドイツでも一、〇〇〇人を超える人達が熱心に稽古をしていることを体で知ってもらうと共に、異国の文化にも触れる機会を提供するためでした。

この章で川島毅君やR・イェットコフスキー氏も述べている如く、ドイツの人達は剣道技術を習得することはもちろんですが、剣道のアマチュアではあっても、工夫をこらして剣と心の修行を続けている日本の学生や一般の人達をも知りたいとする真摯な気持ちでいるようです。この交流によって本物の「交剣知愛」ができそうに思われます。

等身大の国際交流（体当たりドイツ体験記）

岡山大学四年　川島　毅

一九九四年、ドイツのベルリンに行き、直接、剣道をしているドイツ人と接する機会を与えていただきました。

初めて海外に出かけることとなったドイツ滞在の間、ベルリンでは週に三回、始めの二時間はユースと呼ばれる一六歳以下の子供たちの指導に当たり、後の二時間を学生や、社会人などの一般の人たちと稽古を行ないました。そして、ケルン近郊で開催されましたドイツ選手権を観戦したり、旧東ドイツオリンピック選手村で行なわれたドイツ剣道連盟合宿などに参加しながら、多くの人々と交流することができ、楽しく、有意義な時を過ごすことができました。それにしても、思い出しても顔から火が出るような思い出でいっぱいです。

例えば「フリッツベルリン」事件。ドイツでは、フリッツというベルリン自由大学の学生の下宿で生活しました。朝食はできるだけ一緒にし、その日のお互いの予定を話し、数日ごとに自分の欲しいものをメモに書いて交代で近所のスーパーに買い物に行っていました。ある朝、その日の予定も話し終わり、彼との間に何とも言えない沈黙が訪れました。どんなにつまらないことでも何か話さないといけないと思った典型的日本人の私は、ふと彼の顔を見て

「顔がベルリンだ。顔でベルリンを飼っているのか？」と話しかけました。

「フン？」怪訝な彼の顔。

「だから、目の下にベルリンがいるよ」

彼は何を言っているかわからないと言いながら、真剣に聞いてくれました。つまりベルリンという町の名前の由来は、昔、川の中州に熊が住んでいたからで、ベルリンという言葉には熊という意味があるらしいのです。ちょうどそのころ彼はテストのある時期で、目の下に隈を作っていました。そこで「目の下の隈」と「熊」を掛けて冗談のつもりで話してみたのです。辞書を開いたりして五分近くも説明に時間がかかってしまいましたが、これでかなり彼と打ち解けることができました。

次に、「ドイツでも私は子供にもてるのね」事件。ベルリンを一人、観光して廻っていた私は遅い昼食も済ませ、そろそろ稽古に行くために家に帰ろうと地下鉄の駅に行き電車を待っていました。すると、ドイツ人の男の子が私のそばをうろうろします。どうしたのかと不審に思っていると、何と私に道を聞いてきたのです。ところが彼は英語が話せません。彼の話からすると、英語を習うのは五年生からしいのです。お互い四苦八苦しながら話してみると、彼の行きたい場所は私の下宿のそばらしいのですが、言葉で行き方を説明しても理解していないようなので、帰る途中でもあるし彼の手を取って電車に乗り、乗り換えをして目的地の最寄りの駅まで連れていきました。

しかし、そこから先はいくら近所でも私にはさっぱり分かりません。彼も全く初めてらしいのです。ちなみに、私の下宿は西ベルリン一のメインストリートに面しており、繁華街にあったのでした。二人して街角に立ち、私の背中のリュックサックから地図を取り出して捜していると、道行くドイツ人が何人か集まってきて、私に「どこに行きたいのか」聴いてくるのです。（ドイツ人に道を尋ねるとたいていの人は親切で分かりやすく教えてくれますが、まれに嘘をつく人もいます。ご注意ください。単に私の勘違いかもしれませんが。）彼らは私が子供に道を聞いていると勘違いしていたようでした。

男の子をその人に任せて稽古に行くと、ユースの指導をしているレーマンに初心者の指導を頼まれま

した。そうです、初心者といえば子供です。しかも小学四年生の男の子二人と、チャキチャキの女の子一人、英語がもちろん、全く通じません。「昼間の男の子はこの前ぶれだったのかー」と頭を抱えました。ちなみに、ドイツでは剣道は四年生ぐらいにならないとはじめてはいけないんだそうです。

私は必死になってこの子たちに話しかけますが、なかなか通じません。そのうち女の子が、私の顔をじっと見ながら真顔で聞いていましたが、隣の男の子たちに何やら話しています。彼女はこの訳の分からない日本人の僕のために、僕の言ったことを男の子たちに説明してくれていたのです。しかし、ほとんど違うのです。結局、私はこの女の子の命ずるまま、男の子たちと一緒に足さばきや素振りをしていました。この女の子の青い瞳には、私は同級生の頼りない男の子と同列に写っているのではと思え、トホホーとなったことは言うまでもありません。

帰りの飛行機で知り合ったドイツにお住まいの日本の方によると、ドイツ人には日本人はやさしく見えるそうです。だからかどうか、ドイツでは多くの子供たちと仲良くなりました。

日本に剣道をしに来たことがあるという同い年の大学生とも仲良くなりました。彼の名はマーチン、日本語が少し話せるドイツ人で、稽古にほぼ毎回来ていたのでかなり仲良くなりました。あまり私に構ってくれない人々の中にあって、彼は一緒に稽古の後に飲みに誘ってくれたり、私に気を使ってくれました。彼とは剣道についても話しましたが、日本についてや、大学について、日本から剣道をしにやってくる学生についても話しました。彼は、日本から来る剣道を専門にしている人と話をしてもあまり親近感がわかないが、私とは話していて面白いと言ってくれて、嬉しく思いました。（お世辞かもしれませんが……。）また、ユースの子供たちと話していても、この子たちが僕に求めているもの、話したいことは、剣道だけではないんだなと感じました。言葉ではうまく言えないけれど。ドイツに来るまで、来てからもしばらくの間、自分のように剣道が弱くてもいいんだろうか、ドイツ人は強い選手が日本から来ることを望んでいるのではないだろうかと考えていた私の心はいくぶん軽くなり、私でも来て良かったんだと思えるようになりました。ドイツの学生の、ユースの子供たちの自分に対する期待は、始め考えていたところとは違うところにありました。彼らが私に期待していたものは、等身大の交流だったのです。

ベルリンの剣道仲間と

ドイツ選手権で飲みに行ったケルンの人たちや、ドイツ合宿で出会った人たちはみんな、私に「剣道を専門にしている学生か？」と聞いてきます。これが今までの交流の主なあり方だったのでしょう。これから、国際交流しようとする人へ一言。特別海外に行くことだけではありません、大学の剣道部に剣道をしたいといって来る外国人に対しても同様です。私がドイツに行くまで考えていたように、肩に力が入っていないでしょうか？　日本の伝統を学びたいと思って剣道を始めようと考えているのかもしれませんが、友人を求めてきているのかもしれません。自分が日本人で、相手は外国人、剣道は日本古来のもので、なんて堅苦しく考えないでください。もしその人がもっと専門的なレベルを求めたり、自分達では正しく指導できないなら、剣道を教えてもらえる場所を教えてあげればいいのですから。自分を飾らず、堅苦しく考えず、等身大の交流をしてみてください。そうすれば必ず何か新しい発見があるはずです。

またまた余談になりますが、ドイツ合宿のおり、敷地内の小さなパブにマーチンと連れ立って飲みに行きました。そのとき、剣道をしているという大柄な初老の方と知り合う機会を得ました。彼もまた、他の人たちと異口同音に、私に「剣道を専門にしている学生か？」と聞いてきました。「法学部の学生だ」と答えると、彼に「自分は検事をしているが、法学部の学生なら勉強しなければならないだろう。こんなところへ来ている暇はないはずだ。すぐにかえって勉強するべきだ。パブへは年を取ってからいくらでも来ることはできるのだから」と叱られてしまいました。

日本でもドイツでも怒られることは同じだということ発見をしました。この時、いつの間にかマーチンがいなくなっていたのです。彼も法学部の学生なのですが……。

私たちは日本で何を探し求めたか？

ドイツ剣道連盟副会長　ライナー・イエットコフスキー

ドイツでは、剣道をやっているのは変わり者だけです。個人主義のヨーロッパにあっても剣道愛好家たちは、とりわけきわだった個人主義者です。彼らがそれを外にあらわすことはめったにありませんが、彼らの考え方や行動は個性的です。

私はギムナジウムの教師で、小学校と大学との中間の子供たち、若者たち、若き成人たちに授業をしています。職場の仲間内では、概して、私の剣道の稽古に対する無理解が支配しています。体育の先生方のうちですらそうなのです。ドイツでは、三〇歳をこえてもまだ精を出して稽古に励む者は、大人になりきっていないと見なされます。まじめに日常を、つまり仕事や家庭をかえりみるのが普通だというわけです。プロの競技者なら彼らが肉体的に競技に耐えられる限り、さらに幾年か長く、職業とするスポーツを続けることが容認されるでしょう。しかしながら、共同生活に対する文化的貢献をスポーツ活動から期待する者など誰もいません。スポーツと文化は、ドイツでは全く相容れないと考えられているのです。古代ローマの闘士たちのように、スポーツ競技者たちは肉体的活動を終えると、古代ローマの闘士たちは死んでしまい、スポーツ競技者は異なった職業生活を始めるのです。競技スポーツのためのトレーナーになる者はほんの少数にすぎません。

スポーツ競技者の生活のこのような断絶はかなり深い原因に根ざしています。デカルト以来この断絶は、自然科学的に封印され、人間の全体的な像はヨーロッパではもはや不可能であると思われます。

ヨーロッパの人間は「肉体を使う」人間と「精神的」人間とに分かれてしまっています。両方の職業生活がひとりの人物の中に入れられることはめったにないために、ヨーロッパの人間が「肉体を使う」人間と「精神的」人間とに分かれてしまうのは避けられぬことなのです。一方が手工労働者やスポーツ競技者であり、他方が教育職や研究職、管理職につく、より高い教養を身につけた者というわけです。

立身出世をめぐる競争や不安のみが頭脳労働者たちを彼らのハードウェア（肉体）の手入れに向かわせます。彼らが自らの肉体に気づき、真剣に考えるのは、自らを発展させ完成させるためではありません。ドイツでは、飲み屋とほぼ同じぐらいにスポーツセンターがあります。精神をかき立てるべく芸術家たちが飲み屋へ足を運ぶ一方で、経営者たちは彼らの大脳皮質の血行をよくするべく、スポーツセンターでのペダル踏みに精を出しているのです。

おそらく、日本での剣道もまた、次第に肉体的健康のためにのみ奉仕するようになってきているのではないでしょうか。しかし、私は、私たちの日本訪問がもとになって、自らの生活充実のために禅を行ない、また、禅のように剣道に励んでいるコンピューター専門家を思い浮かべることができます。そういった徴候を私たちは、東京よりもむしろ岡山や高知でより多く見出しました。東京では私たちはプロの剣道家に出会っただけです。彼らは確かに剣道の強さの感銘を与えてくれる剣道の先生ではありました。しかしながら、私たちは、もし彼らが全く異なった職業を営まなければならなかったとしたら、どれほど説得力のある人たちだったかを彼らの中に見てとることができませんでした。

岡山や高知の剣道の先生の多くは、他に剣道以外の職を持っています。しかも、彼らは、私にとって多くの模範の剣道を教えてくれました。私は特殊な技や策略よりむしろ、自分が剣道を通じていかに自らを鍛え得るか、そしてまた道場で剣道の稽古をする時間と場所をいかに見つけるかという可能性を探し求めていたのです。

私が自分自身の生を表現するために、剣道の稽古をしようと試みていることをドイツでは、ほとんど誰一人として理解することができないでいます。「おまえがそうやって棒切れを振りまわしているのは、何の役に立つんだい？」と私の同僚は私に尋ねます。一八年来、私は学校で教師をしてます。

そしてその間ずっと私は剣道の稽古も続けているのです。けれども、剣道がなかったら私が全く違った教師になっているだろうと考えてくれる人は誰もいません。

東京にいる私の剣道の先生の多くは、私が剣道の稽古をするために、よりにもよってなぜ岡山へ行くことを望んだのか理解することができませんでした。東京以上によい稽古ができる所はどこにもないですよというのが彼らの意見です。

しかしながら、ここドイツで規則的に剣道の稽古をすることの困難に当たるとき、私は、岡山や高知の剣道の先生方が、時間的拘束の多い職についているにもかかわらず、剣道において、また剣道によって、自らをさらに発展させているかを思い浮かべることにしています。これこそが、私たちの旅行で最も有意義なことだったのです。

（久保田訳）

（岡山日独協会「会報」昭和六三年六月号よりの抜粋）